講演「小学校国語科における学習指導要領の趣旨の実現に向けた授業づくり」

文部科学省　初等中等教育局　教育課程課　大塚健太郎　教科調査官

○　学習指導要領で目指すこと

・　生きて働く力とは、未知の状況に出合った時に、自分が持っている力を出して状況が豊かになるように働かせる力であり、それが「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」と結びつき「学びに向かう力、人間性」とバランスを取りながら育むことが大切。

・　一人ひとりが豊かに輝くことによってこの社会が保たれているんだということを学んでいくためには、どの子であっても、共に学ぶ仲間であるということを実感していくことが大事である。そのために資質・能力が必要なのである。

○　１８歳の意識調査

・　「将来の夢を持っている」が日本は６割である。背景には大人が夢をもって生きているかということにあるのではないか。どこかそういう意識をもって子供たちに接していることが大事なのではないか。

・　「自分で国や社会を変えられると思う」は２割である。社会を支える人がどんどん減っている上に、本気で、子供たちの思いや願いを支えていく教育は何だろうということを考えていかなければ、立ち行かないという状況になっているという危機感を共有していきたい。

○　主体的・対話的で深い学び

・　主体的な学びになっているかどうか、対話的な学びはどこで行われるのか、その結果子供たちは深く学べているかどうか、という視点で授業を振り返ったり、構想するときにそこはどこにあたるのかということを考えたりすることが大切。

・　自分が物事に対して関わりを持って、自分で見通しを持ちながら粘り強く取り組めるかどうか、自分が社会や課題と繋がっているかどうかを実感できる課題（＝主体的な学習）になっていれば、当然と対話は生まれてくる。子供が本当に自分の願いから考えを広げたり深めたりする対話が始まっていれば、その課題は主体的な課題であるだろうということができる。その対話から、気付きや新しい発見があったり、分かっていたことが分からなくなって、もっと主体的に学ばなければいけないと思ったり、じっくり分かったことによって社会貢献ができたりして、深く学びが進んでいくので、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」はぐるぐると回っていくのである。

○　「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を実現するには

・　好きなことは主体的に学んでいる。同じ思いをもっている人と意見を交換してより思いを深めたり高めたりして対話が進んでいく。教室の学習も子供たちが楽しんでいるかどうか、本来学びは楽しいこと。子供たちをそういう場面に出合わせてあげる。どこで、実現できるかを考えていかなければいけない。

○　小学校国語科の目標

・　言語活動を行うこと自体がゴールではなく、資質・能力を育成するための手段である。例えば新聞を作る・劇をするなど、それ自体が出来上がることはゴールではなく、そこに向かうためにどんな資質・能力を育成したのかということを、私たちはもっていなくてはいけない。

・　国語科の授業は言語能力を育成するための教科である。言葉を正確に理解する。そのための能力を

付ける。自分の思いを適切に表現するための言語能力を育成するための教科である。そのために、言葉による見方・考え方を働かせて、それを育成していく。普段何気なく使っている言葉に立ち止まることによって、言葉を正確に理解するにはどうしているのか、どういうふうに読んだから理解できたのか、または相手に自分の思いを伝えるためには、どういうふうな段取りで話したから伝わったのか、どんな構成で話したから伝えられたのかを、理解できなくてはいけない。それを自覚して獲得していくのが国語科の授業である。

○　言葉による見方・考え方と授業改善

・　言葉を実際に使えるようになった時は無自覚である。しかし、その能力を自分の中に獲得しようする時、言葉は自覚的にならないといけない。しっかり段落構成を意識して話せるようになるためには、どこかで段落構成を学習するからこそ、話せるようになる。指導事項に示す資質・能力をしっかりと育成することによって、無意識的に言葉を使えるようになる。言葉による見方・考え方のフィールドが増える。これがぐるぐると回っている。無自覚に行っていたものを意識的に確認したり使えるように学習したりするのが国語の時間である。

○　学習指導要領の趣旨を実現するための授業改善に向けて

・　国語科の学習は螺旋的・反復的に何度も出てくる。年間を通して、指導事項の軸足を変えていくことが非常に大切なので、年間指導計画が大事になる。

・　思考力・判断力・表現力の指導事項は小・中・高と繋がっているので、その系統性を理解すること、そして前の学年までにどういうことをやってきているのか、これがどういう力になるのかということを理解することが大切。構造と内容の把握を大きな指導事項で見るのではなく、子供の状況を把握する上では、系統を理解しながらどの辺りに課題を感じているのか、これからどこに軸足を置いて単元を組むのか、またどの学年のどういうところに繋がっているのかを意識して単元構想を組むことが重要。

・　子供の学びの中では、学習過程は行ったり来たりすることがたくさんある。主体的な学びであれば、戻るということは、その学びに対して責任をもっているということになる。戻るという学習過程を認めるという余裕をもって、単元の構想ができるとよい。

・　よくある授業

①　子供たちの意見や生活からかけ離れた学習課題→子供の学習課題からスタート
　ただし、かけ離れているからこそ学びになることがある。（古典、漢文など）

②　ワークシートに計画を細かく明示→低学年だと安心感はあるが、毎回同じではいけない。段階的に変えていく。

③　毎時間形式だけの振り返り→何のための振り返りか常に考えておく。

④　一人→ペアで→グループで→全体で（いつもこのパターン）→スタンダードからの逸脱も必要。
　子供の必要に応じて学習形態を設定する。

⑤　発達段階や指導要領に合っていない。→複雑で難しすぎるのはよくない。

・　見通し（モデリング・計画表など）→学習活動（ワークシート、練習教材など）→振り返り（観点を示す・毎時間）の活動をパターン化すると子供は主体的になる。「前の時間に何をしたかな。」と振り返ることに時間をかけすぎない。時間を効果的に使う。

・　授業づくりの手順を確認する。

①　単元で取り上げる指導事項の確認

②　単元の目標と言語活動の設定

③　単元の評価基準の設定

④　単元の指導と評価計画の決定

⑤　評価の実際の手立ての想定

→計画通りに進めなくてもよい。子供の苦手な領域を把握して指導時間を変えていく。

（読む力が弱い→読むための指導時間を増やすなど）

○　学習評価の改善の基本的な方向性

・　主体的な学び＝子供が自分で学ぶということに責任を持てるかどうか、子供自身が学習改善に繋がる学習評価をしているかということである。自分の課題に対してやってみて、自分で学習を改善していく必要がある。子供の意識になっているということが、学習評価の改善になる。

・　PDCA サイクルを子供が回せるようになれば、自分で学習を進められるようになる。自分の主体的な課題に対して、プランを立て実際やってみて、その活動について振り返り次のプランを出すというサイクルを子供も大人も両方持っていると、学習を教師が回すのではなく、子供自身が回せるようになる。しかし全部子供に任せるわけではなく、適宜教師が手助けをする、評価の枠を作るということが大事。

・　記録に残す評価については、単元の評価基準に基づき、その実現状況を見ていく。しかし観点別の状況で B 評価にいかない子供については、個人内評価でこれまでどういう状況で頑張ってきたのかを伝えていかないといけない。子供がどういうふうに学んできたのか、今どういう状況にあるのかを同時に伝えていくことで学習を評価し、資質・能力を育成しているということを理解してもらう。

○　「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料から

・　事例２キーワード「主体的に学習に取り組む態度」の評価「世代による言葉の違いについて意見文を書こう」（第６学年）

①　主として「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法の１例

単元で取り上げる指導事項を確認し、単元の目標と言語活動、評価規準を設定

②　学習活動の中に、主体的に取り組みたくなる課題を設定→おおむね満足できる状況（Ｂ）の想定

③　単元の指導と評価の計画の決定→試行錯誤する場面の確保。適切な時間に評価の場面を設定

④　知識・技能においては、情報を収集し、整理して分かったことをノートに整理していればＢと評価

⑤　思考・判断・表現においては、資料から収集した情報とその情報から分かったことが対応していればＢと評価

⑥　具体的な数値や「事実」の出典の明記、客観的な事実から述べられていることが分かる文末表現で意見文を書いていればＢと評価

⑦　主体的に学習に取り組む態度においては、友だちの指摘や教師の助言を踏まえて修正を試みていればＢと評価

○　まとめ

・　主体的に取り組みたくなる態度・・・他教科での取り組みを視野に入れる。普段から子供の生活を確認できる手段を教室に取り入れておく。子供に任せる。

・　適切な時間に評価の場面を設定・・・学習評価の位置づけを考える。建設的、反復的な年間計画。学習活動の特徴を意識した学習展開。

・　試行錯誤する場面の設定・・・学習集団の育成。1 人 1 台端末の効果的な活用

・　時代の変化に対応した・・・知識伝達、正解主義から、考える資質・能力の育成へ

・　効果的な研修の在り方・・・個別の教材研究は大切。さらに指導事項から単元を考える意識へ

・　校内研究授業などを大切に。単元全体の本時であると捉える意識へ